

人種とエスニシティ

安井大輔

人種差別・民族差別はいけないことだとは思っていても、街角で見かける自分と異なる肌の色や顔つき、または振舞いが異なる人びとについて「あの人は白人」「あの人は中国人」などと口には出さなくとも頭の中でなんとなく分類してみることはないだろうか。

「誰々が〇〇人だ」という場合、それはどのようにして決まるのか。国籍か？血筋か？生まれ育った場所か？身につけている文化か？「〇〇人であること」はこれらの組み合わせや取捨選択によってできしており、それは時代や場所によって変わる。ときどきの状況に即して作られ再生産される操作可能なものである。思われているほど自明でも強固でもないのに、同時に自明で強固な現実として存在している「〇〇人であるということ」を規定する概念、人種とエスニシティ、そして民族と国民について整理する。

1 人種

1-1 人種とは

人種 race とは、同一種の間という集団のなかにあらわれた人間の種別区分である。人種概念は人類を体格、皮膚の色、髪の色、瞳の色などによって区分する概念として長い歴史をもつように思われるが、現在のような形で広く流通するようになったのは19世紀以降である。自分たちとは異なる人びとを類別する方法として、その身体特徴に着目することは古代エジプトにもみられる（ベルトラン 2013: 14）が、それが世界中の人びとに適用されるのは大航海時代以降だった。1775年にドイツの動物学者ブ

ルーメンバッハは、皮膚の色と頭蓋骨の形態をもとに、人類をコーカシアン（ヨーロッパおよびアジア系の南アジア人）、モンゴリアン、エチオピアン（サハラ砂漠以南の黒人）、アメリカン（アメリカ先住民）、マラヤン（東南アジアおよび太平洋諸島民）に五分類した。世界の人びとを白、黒、黄、赤、茶という皮膚の色で分けるこの人種概念は外見上の形や色で動植物を分類した18世紀の博物学の伝統を引き継いだものだったが、その後長く通用されるようになった。

19世紀にはネアンデルタール人やジャワ原人などの化石が発見され、皮膚の色や頭蓋骨の形態から、毛髪の形状や目、鼻、唇などの形態、身長、四肢の長さ、血液型など身体についてのさまざまなデータが世界中の民族サンプルから計測され比較された。これらのデータからそれぞれの人種の典型とされる身体部位の色や形が示されることになったが、個々の身体形質のあいだに相関関係はみられない。「金髪の人の虹彩は青色である」「黒い皮膚の人は身長が高い」というかたちでの部位ごとの相関関係は統計学的には有意ではない。つまり、「人種」の前提となっている、さまざまな形質が一セットになって特定の集団が形成されているということではなく、形質によって人類の間に明確な境界線が引けるものではないのである。人種ごとの身体特徴の多くは、人類が世界中に拡散して住むようになり、異なる環境に適応するために生じた差異であり、遺伝だけで決まる形質は血液型や疾病だけだという。さらに遺伝学では、集団内の多様性が集団間の多様性よりもはるかに大きいことが明らかになっている（ベルトラン 2013）。

1-2 人種とスポーツ

最近の遺伝学は、アフリカが、地球上の他のいかなる地域よりも多様性に富む大陸であることを教えてくれる。遺伝子の組み合わせについて計測すると、アフリカ人、ヨーロッパ人、アジア人など大集団の間の差異よりも、集団内の小集団どうしの差異の方が大きいという。これはアフリカ人とヨーロッパ人、ヨーロッパ人とアジア人という集団間の違いよりもアフリカ人の内部の差の方が大きいということだ。アフリカ黒人という、いっけんまとまった集団のように感じられてしまうかもしれないが、それは誤りで、背の高さ、骨格、筋力やその他の形質から生理学的な機能まで、大きく異なった特徴を有する幾多の人間集団によって構成される全体を意味する概念として見直さなければならないのである（川島 2012: 235）。

とはいえオリンピックなど世界規模の陸上競技大会には黒人選手が数多く出場し活躍している。このことからアフリカ人は「全体的に」身体能力に秀でていると思いがちだ。しかしこれは正確ではない。

1992 年の時点における国際級トップレベルの長距離走者 197 名の 141 名はケニアのリフトバレーに居住するカレンジンというエスニック集団の出身者で、カレンジンのなかでもナンディという下位集団がその圧倒的多数を占めていた（川島 2012: 221）。しかもナンディ人が長距離種目に強いのは「走行機会の有無および訓練や努力のいかん、など後天的な要因と高い相関関係にある」（川島 2012: 225）と説明される。彼らは幼少期に 10 km 以上を「走って」学校に通うことも珍しくないという。つまり、アフリカ人が強いのではなく、アフリカの中でもスポーツに熱心なケニアという国の、その中の一部の集団が傑出して長距離走に強いのが実態で、アフリカ人全体が長距離走向きという訳ではない。部分が全体に転化されるステレオタイプの典型的な事例といえる。

生物としての人類が一つの種に属し、どの人種間

の生殖も可能だから、混血によってつねに中間形が生み出され、人種間に厳密な境界を設定するのは不可能である。ところが、そうした人間の身体特徴のうちのごく限られた形質的差異が、本来それとは全く関係ない人間の能力や知能と結びついて主張され、使用されていったところに人種概念の不幸な歴史があった。黒人に対する差別が有名だが、まったく科学的根拠のないものであった。

しかしそうした誤解や誤用があったからこそ、人種概念は 19 世紀から 20 世紀半ばにかけて、人間の集団を分けてとらえる言葉として、国民と並んで多用された。それはナショナリズムの民族鼓舞や国威発揚の文脈で重用され、また植民地統治における住民管理の枠組みとしても利用された。

1-3 レイズム

そして、この人種概念は、人種間に優劣の関係があるというドグマ（独断・偏見）とつねにセットになって一世紀半以上、西洋の思想を支配し続けた。この人びとの認識において「ある人種集団が先天的に劣っており、別の集団が先天的に優等である」とするイデオロギー（観念の体系）を **レイシズム Racism** という。

レイシズムは日本語では人種主義とも人種差別とも訳されるが、この事情を文化人類学者の竹沢泰子は、「英語の“racism”には、日本語の人種主義と人種差別の両方の意味が含まれている」からだと説明している（竹沢 2005: 18）。竹沢はレイシズムを、「人々の認識において「人種」が異なるがゆえにおこなわれる差別行為や人種間に優劣をつけるイデオロギー」と定義している。つまり、レイシズムとは、「人間を人種という概念で区別・分類することができる（人種主義）」という発想と、「人種には優劣がある（人種差別）」という発想の、ふたつのイデオロギーが合わさったものである。

なお、差別が人種をもとに行われるものとなるためには、対象となる集団が人種としてくられる集

団とされなければならない。この人間を人種集団として社会的に区分する過程を「人種化」という。このように「化」というのは、そもそも生物学的実体性がないところにそのような分類を社会的に作り上げたのだという構築性を意識させるためである。つまり、もともと根拠のない人種という集団があるかのように創られたというニュアンスがこの言葉にはある (Ansell 2013: 127-128)。

レイシズムは人間の優劣に関するイデオロギーからなる現象をも指す言葉であり、具体的には異なる3次元の形態をとるとされる。第一は公然とおこなう暴力攻撃である。第二に、人種を前提とした制度がある。たとえば、南アフリカにおけるアパルトヘイトにみられるような居住・職業・教育などの権利の不平等をさす。第三に、「常識」的な表現や認識を介した偏った前提に基づく態度がある。ここには「黒人は身体能力が高い」、「アジア人は勤勉だ」といったいっけん肯定的な表現も含まれる。こうした認識はマスメディアや日々の生活の中で流通・再生産されるなかで、人種を自然なものとして定着させ、ステレオタイプ^①な認識を当然視させることとなる。

第一のレイシズムは論外としても、第二、第三のレイシズムはなぜ問題になるのかわかりにくいかもしれない。第二の制度的レイシズムは、個人の気づくことのないメカニズムを通じて、異なる人種の人びとが劣った地位につながとめられるものだ。たとえば、アメリカ合衆国における黒人は白人よりも貧困層が多く低学歴になりやすい。これは白人が黒人の多い貧困地域を嫌い、より高級な地域に移住し子どもを白人の多い学校に通わせる。このような個々の行為自体は自由選択であり非難はできない。しかし結果として、黒人の多い地区・学校と白人の多い地区・学校の二極化が生じ、社会が人種によって分化・階層化されてしまう。黒人を劣った地位に固定化してしまうのは科学を標榜するドグマやイデオロギーでもなく、個人の意識でもなく、正当化の論理でもない。こうした統計的差別とも呼ばれる現象の

原因は、個人ではなく社会の側にある。

こうした制度的レイシズムを指摘することには長所と短所がある。まず長所は、人種が個人の偏見や考えに還元されえない問題であることが示された点である。科学的に人種概念が否定されたとしても、制度の自然な傾向が改められなければ、差別は続くことが明示された。いっぽう短所は、責任の所在があいまいになる点である。制度によって機能するレイシズムで恩恵を受ける側は、自分たちの特権に無自覚であり、責任をとることもない。責任は人間ではなく制度である以上、誰も被告となることはない (社会全体の問題だと指摘された問題について、個人が日々の行為を改めるようになるだろうか?)。ただし、正しくは責任がないのではなく、誰に対してもあるということだ。つまり、こうした制度の背後には、第三のレイシズムがあり、人びとの日常生活のなかのステレオタイプや偏見を含む認識によって支えられている (問題だと思われなければ存続する!)。レイシズムは、異なる次元にある複数の差別が互いを強化し支えあうシステムといえる。

レイシズムとそれがもたらした社会的帰結は近代のもっとも忌まわしいものであり、人種概念はつねに否定的な意味で想起する必要のある思潮である。そして、人種概念は「それを理由に」抑圧され、差別されている人たちからみると、ただ「神話」や「迷信」として指摘するだけでは不十分なものだ。人種を理由に抑圧される人びとにとっては、それは本質的な抑圧装置——正確には言説装置——として実際に機能しているからである。ただたんに、人種は幻想だと言うだけでは、その社会の多数派にとって都合のよい社会を維持することになる。なぜなら、意図していなくとも、多数派の文化は「あたりまえ」のように社会で実践され、再生産されているからである。人種とは人間の身体に刻印された、歴史的に構成された権力関係であり、幻想にすぎないとしても身体表象は変更が困難であり、逃れられない現実である。

ここから人種は、政治権力による「支配」にとって「有効」な——もちろん被差別者にとっては「有害」な——社会的分類であるという理解が必須となる。つまり、被差別・被抑圧者にとっては、人種という分類は根拠のないフィクションであるかもしれないが、実在するファクトとして機能している社会観念なのである。

2 エスニシティ

2-1 エスニシティとは

人間の集団を区分するカテゴリーとして、人種に代わって、現在はエスニシティという言葉がよく使われるようになってきている。現代的な意味でのこの言葉の発祥は1960年代以降のアメリカ合衆国にある。その問題の背景には、特定のエスニック集団ではなく、白人と黒人、アメリカ先住民、アジア系やヒスパニック系の移民が隣り合って暮らすアメリカのようなマルチエスニック社会における、人びとの帰属意識とその違いがもたらすさまざまな社会問題があった。1970年代にアメリカの社会学や人類学、政治学ではエスニシティをめぐる議論が盛んになった。そして1990年代から冷戦後の世界における民族紛争の激化を受け、複雑な国際関係や各国内の多文化・多民族的状況の現代的なあり方を考える概念として定着するようになったという経緯がある。

エスニシティ概念の出現は、全世界的な社会変動とも連動している。第二次世界大戦後の国際的な移動手段の飛躍的発達、旧植民地から旧宗主国への移民の増加、農村部から都市部への人口移動、そしてこれらにともなう異なった文化背景を持つ人びとの混在と融合は、社会のあり方をダイナミックに変えた。そうした変化の下、多くの社会学者たちは、地域や血縁、宗教に対する所属意識はだんだんと失われ自由で自律した個人になっていくと想定していた。しかし、そのなかでも人びとは自らが帰属する文化的な集団への執着や忠誠を捨てることなく、ときに可視的で、ときに不可視的な境界を作り、集団

としての最低限の自律性を保ち続けていた。このような状況を前にして、なぜこうした前時代的な「伝統」にみえる集団が継続されているのかを解き明かすものとして、エスニシティという言葉が要請されたのだった。

エスニシティ ethnicity とは ethnic から派生した名詞で、エスニック集団やエスニックアイデンティティといった意味を持つ（日本語の民族などとの関係については後述）。もともとなった形容詞の ethnic は「共通の習慣をもつ人びと」を意味するギリシア語の ethnos から15世紀ごろ英語に取り入れられたもので、当初はキリスト教やユダヤ教を信奉しない人びとを指して使われた。19世紀になってからより広く「特定の人種あるいはエスニック集団に特徴的な」という現在のものに近い意味で用いられるようになった（鏡 2010: 133-151）。

現在の社会科学におけるエスニシティという言葉には二つの意味がある。第一の意味は、多民族的状況下でのエスニック集団の「関係」relation やエスニック集団の表出する「性格」「特徴」character など抽象的な現象を表すものだ。第二の意味は、具体的な個々のエスニック「集団」group という実体を指す。

2-2 本質主義と構築主義

エスニシティ論には、エスニック集団の帰属に関するさまざまな議論があるが、その多くは人がそれぞれ何をもって特定のエスニック集団に帰属意識をもつのか、何を根拠に人を特定のエスニック集団成員と決定できるのかという問題が、二つの有力な見解をめぐって展開されてきた。それが本質主義と構築主義である。

本質主義とは、特定の集団や事柄には、簡単には変わらない根本的な性質（本質）があると考えられる立場を指す。その反対が**構築主義**で、一般に「本質」と考えられているものが、実は社会的に“創られた”ものにすぎないとする立場である。たとえば、あな

だが、煮干しのダシが効いた味噌汁の味が好きで「この味の良さは日本人にしかわからない」と言ったでしょう。このとき仮に「ダシの味がわかること」と「日本人であること」の関係を信じているとすると、「本質主義」とみなすことができるかもしれない。いっぽう「味の好みは環境でできあがるもので、日本人であることとは関係ない」と言ったとすると、「構築主義」と考えてもいいだろう。この対象は「日本人」以外にも、「女性」でも「老人」でも「体育会運動部会員」でもかまわない。こうした特定のカテゴリーに属する人びとに対して、「女性」なら「優しい」、「老人」なら「頑固」といった型にはまったイメージが存在している。こうしたイメージは本質主義として構築主義によって批判されてきた（綾部・桑山編 2006）。

この二つの立場は、エスニシティをめぐる議論の基本的な対立概念となっている。なぜなら、人びとがエスニシティに自己の全存在をかけ、時に命までも落とすことがあるのか、それが他のものと取って代わることのできない“本質的な”ものであるからなのか、あるいは、ただ単に“創られた（構築された）”幻想に突き動かされているからなのかを見極めることは現代世界の諸問題を考える重要なポイントとなるからだ。

本質主義の代表格と目されるのが、ギアツ Geertz やシルズ Shills といった人類学者たちだった。例えばギアツは血縁関係の延長として、言語、慣習を同じくすることがもつ人びとのつながりを本源的紐帯 *primordial sentiments* と表現した。そしてインドネシアのような新興国家が統合を欠き絶えず紛争を抱えているのは、人工的に作られた国家の枠組みが、本源的紐帯をもつ複数のエスニック集団を併存させないからだと主張した（ギアツ 1987）。

いっぽうグレイザー Grazer とモイニハン Moynihan、コーエン Cohen などに代表される構築主義者は、エスニシティを、国家の枠組みのなかで人びとが孤独を感じずに生きるためだけでなく、そ

れに基づいて、様々な権利を主張し資源を獲得するための「手段」として捉える視点を打ち出した（グレイザー&モイニハン 1986）。この場合、エスニック集団は、緩やかなつながりをもった何らかの「サークル」、その一員を「会員権」になぞらえることができる。人びとが利害をめぐって複数の「会」の間で入会と脱会を繰り返している様子を考えるとわかりやすいだろう。

現在、社会科学では構築主義的な立場がとられることが多いが、いっぽうで、世界各地の先住民が関わる権利運動の現場などでは、「真正な文化」「〇〇人の血」といった本質主義的な表現が求心力を発揮することもある。そうした社会的弱者による権利獲得のための本質主義的な表現や運動は**戦略的本質主義**と呼ばれ、正当なもののみなされることもある。

構築主義は本質主義が差別や偏見の温床になっている現状に対抗するための立場として提起されたものであり、社会現象や文化現象全般が構築主義的であるという主張ではない。構築性を指摘することに意義がある問題とそうでない問題とは分けて考えるのが適当である。また構築主義と本質主義はどちらかが正しいものとはいえない。そもそも、何の実態もないところにエスニック集団ができあがることもなければ、他の集団と混ざったり外部の影響を受けずに純粋な集団が維持されることもない。本来は、エスニシティの本質性と構築性との“関係”こそが問われるべきなのだ。

2-3 エスニシティと民族・国民の関係

ここまでアメリカ合衆国を中心にエスニシティという用語を説明してきたが、日本語の民族や国民との関係についても説明する必要があるだろう。

エスニック集団という意味でエスニシティという言葉を用いるときは、国家・政治との関わりは必ずしも前提とされていない（青柳 1996: 7-21）。血縁・先祖・言語・宗教・生活習慣などを基礎にした仲間意識が広まっている集団をさす。客観的には固定的

な存在ではないが主観的には確たる存在とみなされるような、集団としての特性を持つものとなっている。

そうしたエスニシティを基盤とし、「われわれ」が一つの国ないし、それに準じた政治単位（自治権、連邦国家における自治州など）を持つべきという意識に達した時、その集団が「**民族**」と呼ばれる。このようにみると、エスニシティと民族は異なる概念だが、ある程度は重なるような事例も考えられる。

「民族」の単位は、短期的には変わりにくいが、長期的には変化しうる。だからといって、どういう風にも自在に変化するということでは無く、歴史的に形成された諸条件の中で、それらに制約されながら、変化したり固定化されたりする。

関連する用語として「**国民**」がある。ある国家の正統的な構成員の総体と定義される。民主主義を前提とすれば、国民はその国の政治の基本的な担い手となる。政治構成員としての定義からすると、一つの国の中にはさまざまな出自・文化的伝統を持つ人びとがいるから、「国民」は必ずしもエスニックな共通性をもつとはかぎらない。国民が政治用語だとするならば、エスニシティ・民族は社会・文化用語であり、次元が異なる（塩川 2008）。

しかしながら、これらが重なっているとみなされることも多い。あるエスニシティが自らの国家を持つよう運動が高まり民族集団となり、その集団が国家を形成したならば、その国民は主としてその民族から構成されることとなる（民族の国民化）。また、ある国家で国民の一体感を創出するために文化均質化政策を進んで、言語や習慣が共通化されたならば、その国民は民族文化を共有することとなる（国民の民族化）。

こうして「民族」と「国民」は重なり合うものの一致することはありえず必ずズレが生じる。このズレをないことに無理やり埋めようとしたり、切り捨てたりすると衝突が生じる。これら国民と民族の境界に関わる問題がいわゆる民族紛争 ethnic

conflict や民族問題 ethnic problem である。

なおこの民族と国民は、もともとはネイションという言葉を通りに訳した結果、生まれたものだった。**ネイション**とその類義語のさす意味は、国・地域ごと時代ごとの差が大きいが、そこには近代的な政治体制形成の歴史が関わっている。たとえば、英語やフランス語においては、エスニックなニュアンスはあまりなく「国民」としてのニュアンスが強い。いっぽう、ドイツやロシアでは、「民族」のニュアンスが強い。ここには市民概念に基づいて近代国家が作られた先発の英仏と民族概念を形成することで統一を目指した後発の独露という違いが反映されている。日本は明治時代にこれらヨーロッパ諸国に範をとって、国民国家 nation-state 建設を進めたため、どちらの意味をもつこととなったのである（酒井 2012）。「日本国民」という言葉がしばしば「日本（大和）民族」と区別されずに使われるのは、これらの言葉が導入された歴史的経緯にも基づいている。以上をまとめると、日本語の民族はエスニシティと比較的近い意味を持つが、英語のネイションはエスニシティとは異なる。この関係は複雑で実際はさまざまな側面が交じり合っているのだが、あえて簡単にまとめたものが図1である。

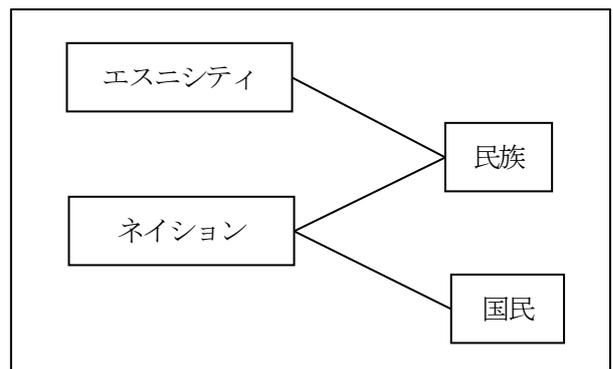


図1 エスニシティ・ネイションと民族・国民（塩川 2008: 9）

そして自らが所属するネイションを尊重する意識と行為であり、ときにネイションへの深い感情的な

関与を構成し、所属メンバーにとっても自己自身を定義する不可欠な属性として感受されるものを**ナショナリズム**という（大澤2014: 14-26）。ネイションの定義は困難だが、何をネイションとするかの基準によって**シビック・ナショナリズム**と**エスニック・ナショナリズム**に区別することもある（塩原2017: 126-129）。ネイションを国民としたときのニュアンスに近いのが前者で、民族としたときのニュアンスに近いのが後者だ。シビック・ナショナリズムは、18世紀末のフランス革命やアメリカ独立戦争といった市民革命をモデルとしており、個人の自由や平等を重視した価値観を共有し、国民社会に対する一定の責任を果たせば、ネイションの構成員になれるという理念である。この原理を日本語にすると「国民主権」となる。いっぽう、エスニック・ナショナリズムは19世紀のドイツロマン主義の影響を受けて確立したもので、固有の伝統文化や血統を継承する人びとが、ネイションの正当な構成員であるという思想である。この原理は「民族自決」となる。ただしこの両者はあくまでも理念型であり、今日のネイションは、エスニックとシビックの混合形態として成立している。それは、各国の国籍法における出生地主義と血統主義²⁾のあり方にあらわされている。多くの先進国においては、両方の側面を折衷した国籍法が採用されている。

3 人種とエスニシティ

ともに論じられることも多い人種とエスニシティだが、両概念はどのようにとらえたいのだろうか。ここでは共通性と違いについてまとめよう。

3-1 エスニシティと人種の共通点

第一に両者は多様な人間集団の相互作用の産物である。外見や話し方、振る舞いなどの違いを意識するのは、多様性あってこそである。人間の移動と接触が頻繁な環境でこそ、両概念は活性化され、見知らぬ人びとが多数行きかう都市的状況の下での人間

の自他識別の指標として機能する。第二に、両者は人間の認知において、普遍的な「自然の」カテゴリーと思われがちであることが重要である。私たちの認識は視覚に大きく左右される。人間の皮膚や髪の色を規定するのはメラニンの含量だが、たとえメラニン量を決める遺伝子対が、人間の身体特徴を規定する情報のうちごくごくわずかな割合しか占めていないのだとしても、やはり「人は見た目が100パーセント」なのである。科学的に間違っただけでも、身体的差異による区別は自然なものに見えてしまう。これはいたしかたないことのように思える。

しかしこの「自然に」見えてしまうということもけっして絶対的ではない。たとえば現在、アイルランド人の一般的イメージが白人であるとみなさない人はほとんどいないだろう。だが19世紀末のアメリカ合衆国北部においてアイルランド移民は「ニガー（黒人の蔑称）」と呼ばれ、いっぽうでネグロ（黒人）は「くすんだアイルランド人 *smoked Irish*」と呼ばれていた。同様に、ユダヤ人、イタリア人、そしてのちのラティーノ（主にスペイン語を母語とするラテンアメリカ出身者）もネグロ（黒人）と同一視されていた。つまり、当時の合衆国北部における白人のなかに彼らは含まれていなかったのである（Meer 2014: 32-35）。彼らは20世紀初頭の南部からの黒人の移動と競合によって、新たに白人に組み込まれることになったのだが、このような歴史的事実から分かることとして、白人というカテゴリーが決して固定的でも不変でもないということは強調しておきたい。

3-2 エスニシティと人種の違い

では両者の違いはどこにあるのだろうか。第一には、権力関係の有無があげられる。人種は何よりも支配集団による服従関係の押し付けであり、劣等性を付与するものだった。いっぽうでエスニシティは人種的な支配関係に起源をもつことが多いが、必ず

しもそれだけでなく集団自身による自己表明による場合もある。また第二に、歴史的な期間の長短を指摘しておくべきだろう。人種は大航海時代からのグローバルな人間接触に由来する概念であり、欧州からの人の大量移動によって人間を階級化するシステムとして植民地体制とともに普及した。人間を階級化する仕組みは古代から世界各地にあり、人種に似た言葉で名づけられていたこともあるが、ヨーロッパ的な人種階級思想が全世界に展開された結果としての現代が構成されており、欧州中心主義的な思潮の負の遺産となっている。対するに現代的なエスニシティは、歴史的には 20 世紀後半以降の比較的新しい言葉である以上、人種に比して「白人の責務^③」と呼ばれるような負の歴史的重みは少ない（もちろんないわけではない）。このことはエスニックという言葉が、エスニックフード、エスニックファッション、エスニックフェスティバルとして使われることはあってもレイシャルフードというようには使われないことに端的に表されている。

3-3 エスニシティと人種の重なり

先般エスニック集団と人種集団には重なり合う部分もあると述べた。それはとりもなおさず人種とエスニシティの共通性と違いを示すことでもある。

人種集団のアイデンティティの基盤は他の集団と異なると認識される身体特徴を強く持つ。これは他集団からの押し付けに由来するもので、権力関係を反映したものである。彼らは固有の差異をもつものとしてアイデンティティを他者から付与された存在である。いっぽうエスニック集団のアイデンティティは、共通の祖先、歴史、シンボルといった文化的な基盤をもつ。これらは、他者からの押し付けであることもあれば自分たちによる主張に由来することもある。そして権力関係を反映することもあれば反映しないこともある。さらに固有の価値ある差異を含意することも含意しないこともある。一般に、エスニシティは自分たちと他者の両者によって構築さ

れる。まとめると、人種は他者からの押し付けとしての他称だが、エスニシティは自集団アイデンティティ構築の側面もあり、そうした自称としての名乗りがエスニック集団を作り出すのである。

これはアメリカ黒人の例から考えるとわかりやすい。いうまでもなく、アメリカにおいて黒人は身体特徴で区別される集団として人種集団である。さらにアフリカ出身（共通の祖先）であり、奴隷の子孫という出自（共通の歴史）、独特の言語（文化的シンボル）を共有することで、人種でありエスニック集団としての特徴も併せ持つ存在となっている。

・新しいレイシズム

人種とエスニシティの重複がおこるのは現代のレイシズムがエスニシティの領域とされる文化的差異をも包含するよう拡張されたことにもよっている。これはどういうことだろうか。

今日では、生物学・生理学に人種の根拠を求めるレイシズムが公然と表明されることはほとんどない。しかしレイシズムは消滅してはおらず、新しい装いのもと継続している。それはレイシズム言説を正当化する根拠が、これまでの生物学的な優劣関係を重視する立場から、文化的差異を重視する方向に変化したということだ。現代のレイシズムは、優劣ではなく「差異」を理由にし、「人種化された」集団に負わされる自然的特徴ではなく、彼らの文化、言語、宗教、伝統、習俗を根拠とするようになっている（ヴィヴィオルカ 2007: 43）。差別の根拠となる人種が「生物科学」ではなく、文化・歴史をもさす包括的な言葉として解釈されるようになっているのだ。この考えはそれまでの古典的な生物学的・科学的レイシズムに代わって、「**新しいレイシズム**」や「**文化的レイシズム**」や「**象徴的レイシズム**」と呼ばれる。こうした現象は欧州におけるアフリカや中東からの移民の増加を受けて、顕著になってきたものだ。

このようなレイシズムで問題視される差異とは、国民、文化、宗教、民族といったエスニシティということばで記述される概念と重なっている。ゆえ

に現在は、生物的な人種と文化的なエスニシティという一般に流通している二分法はますます通用しなくなっている。日本において在日コリアンやアイヌに対する差別について民族差別とされることはあっても人種差別ではないとされる（外国における問題とされることが多い）ものの、現代的基準からみれば、これらはレイシズムの観点からも検討されなければならない。

ただし注意しなければならないのは、こうした転換は必ずしも新しい現象ではないということだ。もともと黒人差別のような可視的な特徴によるものだけでなく、ユダヤ人差別（反ユダヤ主義）のように見た目では区別されにくい違いによる差別もともにレイシズムの名の下におこなわれてきた。両者が区別されずに混在していたところに「科学的」とされる優生学が持ち込まれ 19～20 世紀前半に支配的言説となったものの、その科学は疑似科学として失格し、代わりにそれまで底流にあった文化的側面に基づく差別が前面に出てきたのである。レイシズムは社会集団に対する支配や排除といった差別であるが、その根拠は実に融通無碍でさまざまな要因を取り込むことで継続しているのである。

4 エスニシティへの視角

最後にエスニシティを勉強する際に、注意するべき点を述べておこう。2-2節でエスニシティが本源的紐帯と文化的構築物のはざまに結ばれるものでありその“関係”を見ることが重要であると述べた。ではその両者の関係はどのように考えればいいのか。一つの視点として、イギリスの人類学者パーキン Parkin は両者の共存とすみわけモデルを提案している。パーキンはエスニック集団が混住するアフリカの都市の社会状況を、三つのレベルにわけて考察した (Parkin 1969)。第一のレベルは、親族、婚姻といった生活共同の世界であり、第二のレベルは賃労働にまつわる政治・経済の領域である。そして両者を媒介するインフォーマルな交友関係が、第

三のレベルとして定式化された。

この三つの領域で、エスニシティは各々異なった形態をとって出現する。たとえば第二の領域は、人間区分にナショナルな区分を反映する表現であり、責任を他者に押し付ける社会装置として機能していた。雇用機会などが減少し低賃金労働者のあいだで不満が蓄積する場合、それらは国家間の対立とは関係ないにもかかわらず、エスニックな表現が用いられる。今日、先進国で移民労働者を排斥するさいに「外国人からわれわれの仕事を守れ」（日本なら「在日コリアンは大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国のスパイである」といった具合に、責任を転嫁する装置として作動しているのが、この第二レベルの言説だ。

いっぽうで都市の生活共同という第一の領域では、エスニシティは紐帯として機能している。結婚相手の選択や出身地域を同じくする外国人どうしの相互扶助などを通じて人間関係が形成されメンバー間の相互作用のカテゴリーとして、エスニシティは人びとの生活世界のなかに確固として実在している。

エスニシティに、人びとを動員するための資源とされるような、想像世界に構築された表象・象徴としての側面があるのは事実だ。しかし同時にそこには、暴力や差別に対抗し自集団の結束を高める核となるような本質的な力もある。パーキンによる分類は平板なものかもしれないが、そこにはエスニシティという人間分節と人びとの具体的生活実践との重層的なつながりを尊重し、現実寄り添っていこうという柔軟な姿勢がある。これは、事実か虚構かという二分法ではとらえられない現実社会のエスニシティの複雑さを見通す視点となりうる。

エスニシティについては第二のレベルで語られることが多い。2016年のアメリカ大統領選挙におけるトランプ氏の当選やイギリスのEU脱退のときには外国人排斥を唱える主張が一定の支持を集めたことが指摘されている (金成 2017)。TwitterをはじめとしたSNSでは、日本でも中国人や韓国・朝鮮人への攻撃が渦巻いている。しかしながら、いっぽう

で定住外国人数は増加し続けている。多文化やマルチエスニック化といった言葉は、遠い外国の状況ではなく、アルバイト先や大学の教室で見知ったものとしてふつうにみられる風景になってきている。そうした生活空間における外国人の同僚や同級生としての語りは、第一のレベルのエスニシティについて語りと考えられる。もちろんそこで日本人として外国人に向けて語られる言葉が好意的でも親密なものでもないことはよくある。勤務態度や仕事の出来に対する愚痴であったり、叱責であることも多いだろう。いっしょに働いたからといって理解が進むわけでもなくかえってステレオタイプを強化することもあるだろう。しかし顔の見える世界におけるそれは、相手からの反論や意見もありうる直接的なコミュニケーションであり、顔の見えない相手に向けた一方的な攻撃とは異なる。それをうけて自分自身の偏見や誤解に気づかされることもあるだろう。

SNS やフェイクニュースによって第二レベルの言説は拡散しやすくなっているが、第一レベルの日常生活における接触経験も確実に増えている。そして、両者の交錯するなかで形成される第三のレベルの領域も拡大している。あくまでも一つのモデルだが、マクロな政治経済と「ミクロな」生活とのあいだで行きかうエスニシティの意味は、こうした多元的視点からとらえることが重要となる。

注

① ステレオタイプを批判する際には逆転した表象を作ればよいという意見がよくみられるが、そもそもステレオタイプを肯定的・否定的ステレオタイプに分けて論じることは不可能である。というのも、「〇〇人は勤勉」、「〇〇人は身体能力が高い」といったいっけん肯定的にみえるステレオタイプも、他の否定的ステレオタイプと表裏一体の関係をなしているからだ。たとえば、「身体能力が高い」の裏には、「知能が低い」といったステレオタイプがつきものである（竹沢

2009: 23)。そして特定のマイノリティの賞賛は、他のマイノリティに対する見せしめや責任転嫁に利用されがちである。たとえば、アメリカ合衆国ではアジア系アメリカ人は「勤勉」「高学歴」として好意的なステレオタイプ（モデル・マイノリティ）になっているが、これはあくまでも平均値であり、かえって人種の問題が見過ごされてしまい、成功していないアジア系移民たちの問題が本人の能力や努力の不足となってしまうことも多い。

- ② 各国の国籍法は、出生にともなう国籍取得に際して、誰にその国の国籍を認めるかについて二つに大別される。出生地主義はその国に生まれたものに国籍を認め、血統主義は親の国籍を承継する。科鉄の移民受入国では出生地主義を採用する傾向が強かったが、しだいに血統主義の要素を取り入れた折衷的なものになっている。いっぽう血統主義を維持していた欧州各国は出生地主義を取り入れるようになってきている（塩原 2017: 133）。
- ③ 「白人の責務 The White Man's Burden」とはイギリスの詩人ラドヤード・キップリングの詩の題名である。アジア・アフリカの劣等人種に文明を与えることを優等人種である白人の社会的責務であるとした内容で、植民地拡大や奴隷制が正当化された。

参考文献

青柳まち子編, 1996, 『「エスニック」とは何か: エスニシティ基本論文選』 新泉社.

綾部恒雄・桑山敬己編, 2006, 『よくわかる文化人類学 [第2版]』 ミネルヴァ書房.

ヴィヴィオルカ, ミシェル, 2007, 『レイシズムの変貌: グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化』 (森千香子訳) 明石書店.

大澤真幸, 2014, 「ネイション/ナショナリズム: 定義不能なるもの」 大澤真幸・塩原良和・橋本

- 勉・和田伸一郎『ナショナリズムとグローバリズム：越境と愛国のパラドックス』新曜社，4・26.
- 鏡味治也，2010，『キーコンセプト 文化：近代を読み解く』世界思想社.
- 金成隆一，2017，『ルポ トランプ王国：もう一つのアメリカに行く』岩波書店.
- 川島浩平，2012，『人種とスポーツ：黒人は本当に「速く」「強い」のか』中公新書.
- ギアツ，クリフォード，1987，「統合的革命：新興国における本源的紐帯と市民政治」『文化の解釈学Ⅱ』（吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳）岩波書店.
- グレイザー，ネイサン.，モイニハン，ダニエル. P.，1986，『人種のるつぼを越えて：多民族社会アメリカ』（阿部齊・飯野正子訳）南雲堂.
- 酒井直樹，2012，「レイシズム・スタディーズへの視座」鶴飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス＝スズキ・李孝徳『レイシズム・スタディーズ序説』以文社，4・68.
- 塩川伸明，2008，『民族とネーション：ナショナリズムという難問』岩波書店.
- 塩原良和，2017，『分断と対話の社会学：グローバル社会を生きるための想像力』慶應義塾大学出版会.
- ジョルダン，ベルトラン，2013，『人種は存在しない：人種問題と遺伝学』（林昌宏訳）中央公論新社.
- 竹沢泰子，2005，「人種概念の包括的理解にむけて」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う：西洋的パラダイムを超えて』人文書院，9・109.
- ，2009，「総論 表象から人種の社会的リアリティを考える」『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店，1・26.
- Ansell, Amy E., 2013, *Race and Ethnicity: The Key Concepts*, Routledge.
- Cornell, Steven, Douglas Hartman, 2007, *Ethnicity and Race: Making Identities in a Changing World Second Edition*, Pine Forge Press.
- Meer, Nasar, 2014, *Key Concepts in Race and Ethnicity*, Sage.
- Parkin, David J., 1969, *Tribe as Fact and Fiction in an East African City*, in P. H. Gulliver (ed.), *Tradition and Transition in East Africa*, Routledge & Kegan Paul.

*読書案内

人種・エスニシティに関する研究は広範囲な分野におよぶため、タイトルに「人種」や「エスニシティ」と入っている簡便な入門書は検索してもあまり出てこず、あったとしても叢書や論文集、または専門度の高い学術書が多く、ひるんでしまうかもしれない。参考文献に取り上げたものは比較的読みやすいものだが、それ以外にも日本社会における被差別部落やアイヌ、沖縄出身者や在日コリアンについて書かれた社会科学の文献は、日本における人種やエスニシティの問題を考えるのに避けては通れない。これらを扱った本は新書や文庫になっているものも多く手取りやすいので、ぜひ読んでみてほしい。

小笠原信之，2004，『アイヌ差別読本：シサムになるために』緑風出版.

小熊英二・姜尚中，2008，『在日一世の記憶』集英社新書.

小熊英二・高賛侑・高秀美，2016，『在日二世の記憶』集英社新書.

勝方=稲福恵子・前嵩西一馬編，2010，『沖縄学入門：空腹の作法』昭和堂.

角岡伸彦，2005，『はじめての部落問題』文藝春秋.

角岡伸彦，2016，『ふしぎな部落問題』筑摩書房.

田中宏，2013，『在日外国人 第三版：法の壁，心の溝』岩波書店.

仲尾宏, 2003, 『Q&A 在日韓国・朝鮮人問題の基礎知識』明石書店.
水野直樹, 2015, 『在日朝鮮人: 歴史と現在』岩波書店.

*これから考え調べること

(1) 人種やエスニシティがどのように分類されるのかは、国家の人口統計にもよっている。アメリカ合衆国の国勢調査では、10年ごとに全数調査をおこなっているが、現時点(2018年)では2010年に行われたものが最新版である。最新の調査票を元に人種やエスニシティに関するどのような項目があるのか確認しよう。またその集計結果を確認してまとめよう(可能ならば州ごとの分類にも挑戦してほしい)。なお全数調査の調査票と集計結果は以下のWEBページより閲覧できる。

Decennial Census Questionnaires & Instructions
<https://www.census.gov/programs-surveys/decennial-census/technical-documentation/questionnaires.html>

※2010年調査では多言語ガイドが付けられ、リンク先に日本語ガイドもあるので確認してほしい。

2010 Census Data

<https://www.census.gov/2010census/data/>

※Redistricting Dataにある地図で州にカーソルを合わせると人種の割合が示される。(Internet Explorerで動作可能)

(2) 人種やエスニシティの分類方式は時代ごと国ごとにも異なっている。アメリカ合衆国の過去の分類方式についても上記サイトから確認してみよう。また他の国々との比較については、世界22カ国の国勢調査について紹介している以下の本が参考になる。自分の興味ある国の分類基準についてまとめて報告しよう。

青柳真智子編, 2004, 『国勢調査の文化人類学: 人種・民族分類の比較研究』古今書院.

(3) 人種やエスニシティによる不平等を改善するために雇用や高等教育においてマイノリティを優遇するアファーマティブ・アクション(積極的差別是正措置)の考えがあるが、これを優遇措置が受けられないものに対する逆差別として反対する主張もある。これらの措置は効果があるのか、そもそも望ましいものなのか、不平等や差別を是正する方法は他にはないのか、具体的な事例やデータをふまえながら、考えてみよう。

(4) 日本でもエスニシティが身近な存在となってきたといっても、そのことに対する見方やかわり方はさまざまであり、できるだけ複数の角度から考えてみる必要がある。最近の新聞(WEB版やDBも可)から、日本社会における人種や民族または外国人について述べている記事を持ってきて、そこから読み取れることを書き出してみよう。そして地域、問題点、日本人とのかかわりなどの点について各自の事例を比較し、日本社会における人種・エスニシティの実態がどのようなものかをまとめてみよう。

(5) グループを作って、以下のどれかのテーマについて調べて考えてみよう。可能ならば、「日本人」学生と在日外国人・留学生のあいだで議論をしてみるといいだろう。

- あなたがもっている人種や民族に対する偏見やイメージはどのようなものだろうか、また偏見や差別をなくすにはどうすればいいだろうか。
- あなたの居住地か出身地域にはどの国籍の人がと暮らしているか、法務省の在留外国人統計を元に地域別の違いがあるのかを比較する。

「日本人」が日本に住む外国人に対して、「郷に入れば郷に従え」と言うのと「習うより慣れよ」と言うのとでは、何が同じで何が同じだろうか。

- あなたが外国に移民するとしたら、どの国・地域で就労・居住するだろうか、その国・地域と日本との違いはなんだろうか。
- 日本では「朝鮮人は出て行け」などと連呼し街を練り歩くヘイトスピーチ（憎悪表現）が問題となっているが、どのような人びとがそうした行動を取っているのか、彼らはなぜそうした行動をとるのか、そうした行動への規制について日本と外国ではどのように対応しているのか。